

2019年度 第8回観察会 記録

日 時	2019年11月12日(火)・11月13日(水)	
観察地	沖島漁業協同組合 ⇒ 休暇村近江八幡 ⇒ 野洲市家棟川(やのむねがわ)	
案 内	藤岡 康弘 先生 元滋賀県水産試験場長、琵琶湖の森の生き物研究会事務局長	
テー マ	野洲市家棟川でビワマスを観る	
備 考	参加者 11/12日 23名 (スタッフ西尾)、11/13日 24名 (スタッフ藤原)	記録西尾

【行 程】

近江八幡駅前 ⇒ (彦根観光バス) 堀切漁港 ⇒ 沖島漁港
 沖島漁業組合長が沖島漁業の現況説明、及び島内見学 ⇒ 船で堀切新港 ⇒
 (バス) 休暇村近江八幡・昼食 ⇒ (バス) 野洲体育館・家棟川にビワマスを戻す会の活動状況
 説明 ⇒ 家棟川のビワマス遡上現地を見学 ⇒ (バス) JR野洲駅。解散

1. 沖島

沖島は近江八幡市・堀切漁港から船で十数分、琵琶湖の沖合約1.5kmにある離島で、周囲約6.8km、面積約1.53km²で琵琶湖では最大の島。市内への交通手段は船で通学、通勤用に定期便が運行されている。湖沼の島に人が住む例は世界的にも少なく、学術的にも注目されているとのこと。
 この島へ人が住むようになったのは約860年前で、島の住民は源氏の落ち武者の子孫との伝説が伝えられている。源満仲の家来7人が戦に敗れ沖島に逃れてきて住みついた。その後分家などで家数も増え、更に佐々木源氏の落ち武者も加わり、今のようなようになったという。



戦国時代には琵琶湖水運の重要な拠点としてここに関所が設置されていたといふ。ここを通過する船は、陸上の関所と同様に関税を徴収される代わりに沖島の住民によって航行の安全が保証されていた。関所は当初は六角氏の影響下にあったが、後に本願寺系の自治都市堅田の保護を受け、さらに織田信長の近江平定に従って関所の存続が特に許され、豊臣政権下の天正13年(1585年)頃まで存在していたといふ。現在の住民は約280名、皆家族のようなつながりで暮らしているとのこと。

緑豊かで風光明媚な島内を、沖島漁業組合長に案内していただいた(上写真)。沖島漁港を起点に、湖岸に沿いウナギの寝床状に立ち並ぶ民家を眺めながら、沖島小学校に向かう。

(1) 沖島小学校(右写真)



近江八幡市立沖島小学校の創立は明治8年で144年の歴史がある。沖島は日本国内の淡水湖上の離島で唯一の有人島であるので、当校も淡水湖上の離島で唯一の小学校。1960年当時、全校児童数129人となりピークを迎えたが次第に減少。このため近江八幡市内全域から通学できる小規模特認校に指定されている。2019年児童数は14名で、教師の人数のほうが多いとのこと。小学校の前はなぎさ公園で、自然豊かな穏やかな環境下で、児童の個性に合わせたきめ細かな教育ができるることは、すばらしいことと思った。

(2) 島の産業

① 石材業

沖島は太古の火山活動で生み出された石英斑岩(注)の産地で材資源に恵まれ、石材業が盛んで琵琶湖疎水や南郷洗堰の建設資材に用いられた。明治20年頃急激に発展し、島はそれによって大

きな収益を上げていたが、漸次減退し、戦後は全く姿を消した。今は採石場跡が保存されているとのこと。

(記録者注) 石英斑岩：火山岩の一種で、斑晶が大きく特に石英が大きいので石英斑岩といわれる。

② 漁業

沖島は主漁副農の半農半漁村である。織田信長によって特権的な専用漁場を与えられて以来、これを活かして漁業に専念してきた。漁協正組合員140、準組合員7、1戸1組合員制をとっているので全戸数の95%が漁業に関係している。女性従事者も増えてきているとのこと。

③ 農業

島民の農業への関心は強く、急傾斜地や対岸まで田畠を開墾してきた。中之湖入口付近や大中干拓地を買い入れ、昭和50年には総農家数112で全世帯の70%以上が農業をしている。ほとんどが漁業をしている第2種兼業農家である。島内には尾山の北西斜面を平坦にして作られた畠と各家のそばにつくられた菜園があるだけである。

島外にある農地は約50haで食糧はほとんど自給自足し、漁船に農具を積んで出作りに行く姿は沖島ならではの風景とのこと。

(3) 島の交通

島内には自動車はなく、道路に信号機はない。車が乗り入れることのできない沖島では島民に欠かせない乗り物は三輪自転車で、転ばずに重い荷物も運べる必需品のこと。また小型船舶は一家に1艘あり生活を支えているという。

藤岡先生のびわ湖への想い

休暇村近江八幡にて昼食後に、藤岡先生からホテル前の湖岸から比良山系を遠望しながら、琵琶湖の成り立ちや歴史、琵琶湖の水質が改善するも激減した漁獲量が一向に回復の兆しがみえない琵琶湖漁業の現状など、お話をいただいた。藤岡先生は滋賀県水産試験場長はじめ、職員として長年にわたり豊かな琵琶湖の再生を目指して取り組んでこられただけに、琵琶湖への熱い思いや愛情がひしひしと伝わってきたひと時であった。、



2. 「家棟川にビワマスを戻す会」の活動

(1) プレゼンテーション

野洲市体育館会議室にて、家棟川にビワマスを戻す会代表の山本義昭氏の挨拶につづき、滋賀県琵琶湖環境科学センター主任研究員佐藤祐一氏（右写真）から会の活動紹介があった。

概要以下のとおり。

家棟川は滋賀県野洲市の、旧野洲町・旧中主町域を流れ琵琶湖に注ぐ川。旧野洲町域を流れる間はごく小さな里川であるが秋期に琵琶湖からビワマスが遡上してくる。このビワマスを家棟川のシンボルとして、ビワマスが遡上、産卵、繁殖できる環境を整えることなどを通じて、家棟川およびその支流河川（童子川、中の池川など）の自然環境を再生し、ひいては野洲市のまちづくりや活性化につなげていくことを目的としている。多くの市民、行政、専門家、企業の協働のもと、家棟川流域の清掃活動、水・魚調査とビワマスの産卵及び稚魚調査、ビワマスの産卵床の造成と魚道の設置に向けた検討、ビワマスの密猟の監視活動などを行ってきた。



魚道について、家棟川にビワマス遡上の妨げになる落差工（落差3.2m）への対処としてビワマスが遡上する2016年と2017年の10月の魚道を設置し、2018年にはこの魚道を経由して遡上するビワマスを映像で確認できた。（DVD映像を映写）

地道な努力を続けることで、まだ個体数は多くはないがビワマスが戻りつつあることを実感していると述懐された。

【Q&A】

Q1：サケとビワマスの回帰性について

A1：ビワマスもサケと同様回帰性があり、4～5年経過すると生まれた川に約半数戻る。

Q2：密漁はなぜ起るか

A2：大量に獲ると一匹3000円くらいで売れる。密漁は雨の夜に行われる。禁漁期（10月1日～11月30日）以外は密漁ではない。

Q3：ビワマスの漁獲量

A3：かつては最高120トン/年獲れたことがある。昨今は20～40トン/年程度で推移している。

Q4：ビワマスにとり外来魚の影響

A4：ビワマスは湖のかなり深い所を生息域にしている。浅いところに棲む外来魚の影響は受け難いと考えている。

（2）家棟川現地にて

① 見学に先立ち、藤岡先生のコメント

家棟川は野洲市域を流れる一級河川とはいえ小河川で、こんな小さな川でビワマスの遡上を復活させる取組がなされ、地元企業や行政を動かし、町起こしにもつながっている。今日、ビワマスの姿は必ずしも目撃できるとは言えないが、このプロジェクトの人々との交流を通じてこの活動への理解を高めていただきたい。

② 家棟川の産卵床（近くに魚道を設置）付近で11月12日は魚影をみることはできなかったが翌13日には2匹を観察できた。



魚道



魚道を超えたビワマス (DVD映像から)



ビワマス魚影

【ビワマスに関する書籍の紹介】

今回案内していただいた藤岡康弘先生著 びわ湖の森の生きもの3「川と湖の回遊魚ビワマスの謎を探る」（サンライズ出版 本体1800円）

琵琶湖博物館館長・京都大学名誉教授 川那部 浩哉先生は帯書に「地球上で最も高いサケマスはサクラマス群だろう。その一つである琵琶湖固有のビワマスを、子どものときから「魚つかみ」の好きだった藤岡さんが縦横に語ったもの。面白くないはずがない」と賞されています。

。

以上